

原 著

アイリス・マードックの *The Green Knight* における Bellamy の目覚め

橋 本 信 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 7 年 4 月 19 日受理)

Awakening of Bellamy
in *The Green Knight* by Iris Murdoch

Nobuko HASHIMOTO

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Apr. 19, 1995)*

Key words : suffering, goodness, prayer

Abstract

Bellamy, who once suffered from a severe depression, is now trapped in a false religious fantasy and wants to go into a monastery. In his preparation for going into a monastery, he got rid of his beloved dog, Anax, and other comforts in his life. He would not listen to Father Damien's advice which urged him to go back to his friends and get an ordinary job. But an encounter with Peter and Father Damien's confession of the loss of his faith awake Bellamy from a fantasy. He finally resolves to stay with ordinary people and help them. His resolution is materialized in his rescue of Moy from drowning. Murdoch clarifies her view on Christianity in the process of Bellamy's awakening: her disbelief in any personal God or any supernatural divinity or in the divinity of Christ or in eternal life.

要 約

かつて、ひどい鬱病にかかったことのある Bellamy は信仰に救いを見出し、僧院に入るべく準備を進める中で、愛する犬の Anax を手放し、安逸な暮らしをすっかり捨て去ってしまう。Damien 神父の、普通の暮らしの中に留まって人々を助け、幸せになるようにとの忠告に

も耳を貸そうともしない。しかし、Peter との出会いと神父の信仰の放棄が Bellamy を目覚めさせ、彼は人々の中に留まって、善と幸せを求めようと決意するに至る。この決意は Moy の生命を救うことで現実のものとなる。Bellamy の目覚めの過程で、マードックは人格神、キリストの神性や、永遠の生命を否定し、自己の宗教観を明らかにしている。

はじめに

マードックの初期の作品 *The Bell* では、人里離れた尼僧院にこれから入ろうとしている神秘的な女性 Catherine が登場する。しかし、彼女は信仰のためでなく心の奥深くに秘めた恋に苦しんだ挙句にこの世を捨てようとしていたのだということが、尼僧院に入る直前の Catherine の命がけの告白によって判明し、Catherine は尼僧院に入る一步手前でこの世に踏み止まることになる。アーサー王伝説に登場する緑の騎士を下敷きにしたマードックの1993年出版の最新作 *The Green Knight* にも、自分の進むべき道はこれしかないといひたすら僧院に入ることを求める Bellamy が登場する。しかし *The Green Knight* でも、*The Bell* の Catherine と同様に Bellamy は結局最後には僧院に入る道を捨ててしまう。マードックは登場人物に俗世を捨てることを望ませながら、何故その一步手前で方向転換をさせるのだろうか。このことを通してマードックは一体何を語っているのだろうか。それを明らかにするのが本論の目的である。

1. Bellamy の自虐性と他者への依存

僧院に入ることしか念頭になく、それに合わせて自分の全生活を変えてしまおうとしている Bellamy とは一体どのような人間なのだろうか。彼は普通の生活に適応出来ず、常に傍観者にしかたれない。仕事に関しても、適当に妥協することの出来ない性格のせいで、今まで様々の事をやってはみたが、どこにも安住できなかった。一時はひどい鬱病にかかり、絶望的な気持ちになったこともあった。そのような常軌を逸した生活の中で、彼が一条の光を見いだしたのが信仰への道であった。死への願望に取り付かれていた時に相談した神父から Damien 神父を紹介され、たちまちのうちに彼の虜となり、彼に心酔した Bellamy は、Damien 神父の生活こそ我

が理想の生活と思い込むようになった。善なること以外は一切のことを拒絶した暮らしをしたいと願い、そのために僧院へ入る準備を進める中で、周囲の人々の驚きをよそに、この世的喜びを捨て去らなければならないと思い込んだ Bellamy は、こよなく愛する犬の Anax を手放し、快適なフラットを売り払って、貧しい人達の住む地区の一間限りのフラットへ移り住み、親しい友人達からさえ遠ざかってしまう。この Bellamy の自虐的な面は次の引用に顕著に表れている。

... Bellamy, who was exiled — had exiled himself from warmth, friendship, love, and all the ease and comfort of the affection¹⁾.

自分の行動が他者にどれほどの悲しみを与えているかに気づかない彼は、Louise とその娘達に大きな喜びを与えてきた海辺の別荘さえ手放す積りでいる。しかし、Bellamy の願望に反し、彼はなんら他者の助けになれない。助けを必要としている人達の力になりたいと思いながらも、同じフラットに住む貧しい人達と親しくなることさえ出来ず、罪悪感にさいなまれる。虐待されている女性の救済のために働く Tessa から、自分の仕事を手伝って欲しいと、願ってもない人助けのチャンスを与えられても、そのような女性の呻き声など考えただけでもぞっとしてしまう。結局、この世に適応出来ない彼は、頭の中で考える事と現実とのギャップを越えることが出来ず、僧院にさえ入れば何もかも解決するかのごとく思い込み、僧院に入ることを性急に求めている。極端な自己否定に生きる彼は権威ある人間に依りかからないとどうすることも出来なくて、以前は Lucas に、今は神父に依存している。しかしながら、この神父への依存が尋常のものでないことは、Bellamy が神父に手紙を書く時の興奮状態や、それによって辛うじて鬱

状態に陥るのを免れていることに表れている。

次のように述べている。

2. Damien 神父による Bellamy の問題点の把握と Bellamy に対する忠告

神父は僧院での生活について、Bellamy がロマンチックな幻想を抱いていることを憂慮するとともに、彼が神経症的であることを見抜いており、過度の罪意識を持つのは良くないと次のように忠告している。

... I think you should abstain from brooding emotionally over early sins. An excessive cultivation of guilt may become a neurotic, even a erotic, indulgence²⁾.

神父は彼の不安定な精神状態は鬱病のせいだと考え、医者に診て貰うように勧めている。この神父の指摘に対して、自分が病的であることを Bellamy は強く否定するのだが、その実、自分が狂気ではないかと恐れている。神父はさらに、Bellamy が自分に依存しすぎるだけでなく、Peter に対しても強い emotional attachment を持っていることに強い危惧の念を持っている。Bellamy のマゾヒスト的自己否定と、キリストに打ちすえられ、苦しみを受けることによって純化されたいという願望に対しては、人間の魂に巣くう邪悪さゆえの白昼夢のようなものであると論している。

A positive desire to suffer, to be, as you put it, in hell and spurned by Christ, a desire to be destroyed: these are familiar daydreams, fictions contrived by the evil one who dwells at home in the soul of men³⁾.

マードック自身が“suffering”について述べている言葉が、Bellamy の“suffering”への強い願望を理解する助けとなる。彼女は宗教を“soothing drug”⁴⁾と呼び、「キリスト教は suffering の宗教で、a man in torment が中心的イメージで、そこにあらゆる慰めがある。」のだと、

... Christianity is a religion of suffering, its central image is of a man in torment. There are all kinds of consolation here: such as an invigorating sense of guilt combined with a countermanding experience of innocence and of salvation through some imagined punishment⁵⁾.

神父は、キリスト教徒を激しく弾圧したパウロがダマスコ途上で神から直接語りかけられ、改心した時のような神からの劇的なしるしを求めて止まない Bellamy に、そのような劇的な出来事を求めるのはこの世的脅迫観念に他ならず、宗教とは相反する魔術を求めていることになるのだと、宗教が簡単に魔術に墮す危険性を指摘している。

... for ‘God’s punishment’ and wanting to be hurled to the ground like St. Paul, these are by worldly obsessions in disguise. You are in danger of exalting a sentimental Christ. You secretly attached to magic, which is the enemy of religion. Often we enliven our sins by ‘punishing’ them⁶⁾.

しかし、親しい友人達の元に戻り、仕事を心得、普通の生活をするようにとの神父の再三の忠告にも、Bellamy は聞く耳を持たず、相も変わらず自分勝手なロマンティックな幻想を抱き続けている。

3. Bellamy と Peter との関わり

Bellamy が生き方を方向転換することになったのには Peter が深く関わっている。初め、Peter は Bellamy が傾倒し、深く尊敬する Lucas に危害を加える人物として Bellamy の前に登場し、Bellamy は自分が Lucas を Peter から守らなければいけないと思ったのだった。しかし、Peter

との関わりが深まると、神父に宛てた手紙の中で、Peter のことを “a spiritual man” と呼ぶようになり、彼の役に立てるのは自分しかないのだと考え、無意識の内に Peter を助けることに自分の存在意義を見い出すようになっていった。神父と同様、Peter も Bellamy が僧院に入ることは疑問を投げかける。Bellamy の神父への傾倒に対して、Bellamy が高潔で理想の人間として描く神父のような人間は、狂人か世に恨みを抱いている人間であることが多いと、Peter は次のように忠告するのである。

... Ascetics are not saints, they are just as likely to be madmen seeking for magic power or miserable remorseful wretches with a spite against the world. It is more likely that you could help him. That is what he wants to conceal! Why don't you stop at destitution?⁷⁾

そして、神父の方こそ Bellamy の助けが必要なのだと言ったのだ。僧院入りに反対なのは、友人の Emil も同じであって、そのような生き方が出来る人は極く稀で、Bellamy にふさわしい生き方とはとても思えないと止めようとする。「君は暖かい心の持ち主なのだから、以前のように、普通の人達の中で仕事をし、人の助けとなるように。君の目を覚まさせて、今の惨めな状態から引っ張りだしてくれる人が君には必要なんだ」と Emil は言う。

... Most tragic of all are those who are silent prisoners of an asceticism which for them is pure hell. Thus whole lives can rot away. Indeed, Bellamy, it is a way to hell, believe me, for such as you it is. You have a warm heart, you must work in the open with people, aid them as you used to do, be with ordinary men. I think that deeply you see this and believe it, you need only someone to

shake you, to beat you a little, to pull you out of that miserable dark dead end⁸⁾.

Emil も Peter も共に、若い頃に自分も Bellamy と同じような事を考えたことと述懐し、神父同様、Bellamy の考えが若さ故のロマンティックな幻想であることを示そうとする。Peter が Lucas に殺された場面を再現しようとした際起きた出来事を、Bellamy は自分が求め続けてきたしるしが与えられたかのように受け取り、ますます Peter への傾倒を深くする。しかし、その一方、Peter との付き合いの中で断っていたビールを飲み、抜いていた朝食を食べ、楽し気に話す自分に我ながら驚きもする。現実の世界から遊離して人との接触を断っていた Bellamy が、自ら進んで Peter と Lucas との和解の調停役を買って出ただけでなく、Peter の秘書となり、彼が善を行う手助けをする生活を選ぼうとしたことは、Bellamy の生き方の一大方向転換であった。

4. ダミアン神父の信仰放棄

ひたすら Peter の役に立ち、彼を助けたいと願う Peter との関わりの中で、徐々に人間性を取り戻しかけていた Bellamy にとって、信仰を失って僧院を去ったと告げる神父からの手紙は、晴天の霹靂のような大きな衝撃であった。しかしながら、神父は Bellamy の自分への心酔の中に大きな危険性が潜んでいることを、ずっと以前から認識していたのだった。

One of the greatest temptations is the self-consoling wish to be the saviour of another's soul⁹⁾.

不完全な人間を完全なる者と思い込み、畳み掛けるように次々と問いを発する Bellamy のひたむきさを前にして、神父も根底から揺さぶられずにはいられなかった。自分を聖人のように思っている Bellamy に対して、そうであるかのごとく振る舞い続けることに、神父は強い罪悪感を感じずにはいられなかった。神父は遂に Bellamy に対して、自分は最早人格神への信仰

も持っていないし、キリストの神性も永遠の生命も信じられないし、俗世を捨てることに意義を見い出すことも出来なければ、魂の救済も信じられないと、現在の彼の心境を手紙で率直に告白するに至る。

I have, . . . lost my faith. I can no longer believe in the God of Abraham, Isaac and Jacob or indeed in any personal God or supernatural divinity, or in the divinity of Christ or in eternal life. I do not believe in what I once took to be my lifelong mission, the abnegation of the world and the saving of souls¹⁰.

Peter の指摘したように、教えられたのは自分の方であり、幻想であったり、実現出来そうにもないことではあったが、Bellamy の俗世を捨てたいという熱烈な願望に心打たれたことを神父は率直に告白した。Peter との交わりの中で、自分の進むべき道は僧院に入ることではないことに気づきかけていた Bellamy は、神父の告白に接し、人の魂を左右するような影響を及ぼすことを恐れていた神父の苦悩の深さを、やっと理解することが出来たのだった。

How agonizing it must be for a priest to give up all that magic power -- magic, yes, he feared it, power over souls¹¹.

5. Bellamy の新生

Peter の秘書として善を行う手助けをすることこそ自分の生きる道だと思ったのも束の間、Peter が亡くなり、今また神父が信仰を失ったという告白の手紙を送りつけて自分の前から姿を消し、呆然自失の Bellamy にとって、神父が別れに際し、自立を促すために贈ってくれたエックハルトやヴァーギルの次の言葉が新しい力を与えてくれることになった。

Do not seek for God outside your

own soul¹².

. . . Your will is free, upright and sound, it would be wrong not to be ruled by its good sense¹³.

今まで自分が考えていたことが幻想でしかなかったことに気づいた Bellamy が最初にしたことは、愛する Anax を取り戻すことだった。元の飼い主 Bellamy を見た時の Anax の悲鳴のような狂喜した声に、Bellamy から引き離されていたことが、Anax にとって如何に残酷で不自然なことであったかが伺える。やっと目が覚めた Bellamy は、神父が繰り返し勧めてきたように、孤独を求めず、人々の中へ出かけて行って、隣人を助けようと決意するにいたる。この決意は溺れかかった Moy を救済することで現実のものとなる。溺れかかっている Moy を見て、Bellamy は自分の生命の危険をも省みず海に入っていく。最早自分は死んだと思っていれば死を体験し、やっとの思いで危険な状態から脱して水の中から立ち上がった時のことを、死からの蘇りのようであったと Bellamy は後になって思う。この“resurrection”という言葉に彼の新生が象徴されている。同時に、姿を消していたあざらしが再び戻ってきたことにも Bellamy の新生が示されている。マードックは「善を求めすぎて神経症になるよりは、中庸を心得た幸せな人間になる方が良い」と次のように述べている。

. . . striving too hard, against our natural impulses, for virtuous life may be a mistake. Better to be a well-adjusted moderate happier person than a would-be-good neurotic¹⁴.

Bellamy は正にこの中庸を心得た幸せな人間に生まれ変わったのだった。彼は長い間の苦悩を経て、やっと神父の goodness と happiness を求めるようにという忠告の意味を悟ることが出来たのだった。Bellamy を愛する人達の幸せの象徴であった海辺の別荘に再び人々が訪れる

ようになり、マードックのこよなく愛する海で、彼の決意を具現化する出来事が起きたことにも、彼のこれからの幸せが予見できそうだ。

6. 祈りについて

この作品の中で神父の告白を通して、人格神への信仰を否定し、キリストの神性や死後の世界を否定し、いわゆる正統的キリスト教の信仰は否定しきっているマードックだが、神父から Bellamy に繰り返し祈りを勧めさせることによって、祈りの有用性を説いていることは注目に値する。マードックは1983年に行われたインタビューの中でも祈りの有用性について触れている。それによると宗教心があれば利己心を抑制できるし、たとえその信仰が中途半端なものであったとしても、祈ることを知っているからその信仰は無駄ではないという意味のことを述べている。それでは彼女のいう祈りとは一体どのようなものであろうか。同じインタビューの中で祈りについて次のように述べている。

I don't exactly pray to anyone. I retire into myself, perhaps have a conversation between the higher self and the lower self or something of that sort. . . an ability to withdraw from immediate concerns and to be quiet and to experience the reality of what's good in some way. But one is doing this all the time, through beautiful things, through art, through music, and of course very much through other people, apprehending

their reality and their goodness or wanting to help them and so on¹⁵⁾.

つまり、祈りとは日常生活の煩雑な事柄から離れ、一人静かに瞑想するようなことだという。しかし、現実から逃避することではないことは、絵や音楽、さらには、人との関わりの中でも絶えず行っていることだと述べていることから理解できる。祈りについての次の言葉は、祈りが高みを目指す、つまり moral や virtue と関連していることを示しているだろう。

The prayer is keeping quiet and hoping for the light¹⁶⁾.

justice を求め続けた Peter は、殺された場面を再現しようとして起きた出来事の衝撃で、今まで忘れていた God を思い出し、慈悲の心を持つに至った。Peter は後に、この God という言葉は“a spiritual path”を手短かに表現するために使用したのだと説明しているところから、祈りを指していると考えてもいいだろう。すると、正義を主張するだけでは、冷たい、時として復讐心だけの人間になってしまうので、慈悲深く人を許すことが出来るようになるには祈りが必要となってくるということになる。真摯に善なる生き方を求めた Bellamy、そして、それに誠実に応えようとして、ついに聖職者としての自己の欺瞞性を告白せざるを得なかった Damien 神父、両者ともに、苦悩を経て、祈りの心を持った誠実な人間としての新しい生き方を見つけることだろう。

文 献

- 1) Murdoch I (1993) *The Green Knight*. Chatto & Windus, London, p153.
- 2) *ibid.*, p39.
- 3) *ibid.*, p221.
- 4) Murdoch I (1992) *Metaphysics as a Guide to Morals*. Allen Lane: The Penguin Press, New York, p481.
- 5) *ibid.*, p81.
- 6) Murdoch I (1993) *The Green Knight*. Chatto & Windus, London, p154.

- 7) *ibid.*, p224.
- 8) *ibid.*, p333.
- 9) *ibid.*, p221.
- 10) *ibid.*, p265.
- 11) *ibid.*, p465.
- 12) *ibid.*, p291.
- 13) *ibid.*, p368, p465.
- 14) Murdoch I (1992) *Metaphysics as a Guide to Morals*. Allen Lane : The Penguin Press, New York, p490.
- 15) Jo Brans (1988) *Virtuous Dogs and a Unicorn*. In : *Listen to the Voices : Conversations with Contemporary Writers*. Southern Methodist Press, pp183—185.
- 16) Murdoch I (1987) *Acastos*. Penguin, New York, p108.